

宮城県仙台市立榴岡小学校

「帰宅困難者の炊き出しを地元の赤十字奉仕団と協力」

《 概要 》

宮城県仙台市立榴岡小学校（久能和夫校長、全校生徒数555名）は、東日本大震災の被災県でもあり、学校はJR仙台駅近くに位置していることから、交通機関の麻痺による5,500名を超える帰宅困難者を学校が受入れ、行政に引継ぐまでの間、運営を行いました。そこには、地元の赤十字奉仕団と協力して炊き出しを行う児童の姿がありました。

《 震災当日 》

平成23年3月11日の震災当日は、寒い日でした。地震が発生した直後に、交通機関が麻痺し、JR仙台駅に近い仙台市立榴岡小学校は、帰宅困難者を受け入れ、行政に引き継ぐまでの間、小学校が運営を行いました。

仙台市立榴岡小学校は、平成21年から学校敷地内に地元の赤十字奉仕団の救護資材倉庫が設置されています。この倉庫には、救護資材に加え大鍋やプロパンガス用バーナー台（五徳）が整備してあり、炊き出しを行うにも、日ごろからの地域商店等との関わりから、プロパンガスなどの依頼についてもスムーズに行うことが出来たといいます。



赤十字奉仕団と協力して食事を配膳する
青少年赤十字のメンバー

帰宅困難者の受入れとして、地域の赤十字奉仕団が行う炊き出しには、児童も協力し、借りた奉仕団の真新しいエプロンを身に着けた児童がペットボトルや食料などを配りました。協力した児童は、「お手伝いは親に進められて来たけど、「ありがとう」との言葉がうれしかった。」と話をしてくれました。

《 日頃の「気づき、考え、実行する」が、震災にも生きた 》

以前、仮設トイレやペットボトルの水などは、校舎内の3階に整備しており、避難訓練のたびに出したり、戻したりしていましたが、緊急時にすぐ使えないとの理由から、児童の発案によって体育館に備えられるようになっていたのも、帰宅困難者をスムーズに受け入れられた理由だといいます。



久能和夫校長は、「校区（地域）との関わり、奉仕団との連携などは義務教育の強みです。奉仕団（祖父母世代）と子ども世代をつないで、抜け落ちている中間の親世代と一緒に活動を進めていきたい。」と話をされました。

学校内に整備されている救護資材倉庫

（写真左 久能和夫校長）